

介護に携わる人の応援マガジン

月刊

月刊 介護保険

2018
4
vol. 266

特集

医療と介護の 切れ目ない提供をめざして

— 平成30年度介護報酬改定 —

レポート

最先端の 認知症予防とケアを発信

国内外の有識者が参集 「認知症国際アジア会議 in 加賀」

インタビュー

田中 滋 さん (社会保障審議会介護給付費分科会長)

自治体はいま

千葉県

選ばれる事業者

食をとおした街おこしで多世代がつながる

ユニバーサルカフェ「Tsuda Machi Kitchen(つだまちキッチン)」
(徳島県徳島市)

株式会社 法 研



選ばれる 事業者

取材：シニアライフ情報センター

食をとおした街おこしで 多世代がつながる

ユニバーサルカフェ 「Tsuda Machi Kitchen (つだまちキッチン)」 —徳島県徳島市—

近年、従来の福祉のイメージから脱却した新しい福祉のあり方に挑む若い世代の活躍が注目されている。徳島県徳島市にある社会福祉法人あさがお福祉会の法人統括施設長、保岡伸聰さんもその1人だ。「福祉をもっとカジュアルに！クリエイティブに！」「ふくして街おこし」を合言葉に、地域に密着した徳島県版ユニバーサルカフェ（県知事認可地域共生事業）第1号を開設した。事業が地域にもたらす効果を取材した。



調理をとおしてリハビリテーションを行うデイサービス



ユニバーサルカフェ

3月、保岡さんは閉店したスープマーケット跡地を買い取り、「つだまちキッチン」開設に向け動き出した。

徳島県版ユニバーサルカフェは、地域住民相互のきずなを強めることを目的に、年齢、障害の有無に関係なく、福祉ニーズに幅広く対応できるワンストップ型の福祉拠点づくりを奨励している。「つだまちキッチン」は、その第1号となつた。現在は「つだまちキッチン」のほか、徳島市内でも5カ所が認定を受けている。

「Tsuda Machi Kitchen」（以下、「つだまちキッチン」）は、徳島市中北部からバスで15分の、かつては漁師町として栄えた場所にある。高齢化にともない地場産業が衰退したこと、以前は地域に2カ所あつたスーパー・マーケットが相次いで閉店し、過疎化に拍車がかつっていた。ちょうどその頃、徳島県がユニバーサルカフェ構想を提唱したこともあり、2014年



できたての惣菜を求めて住民たちが訪れる

福祉会は、1997年開設。保岡さんの父親である保岡正治さんが1979年に開設した医療法人あさがお会（48床の保岡クリニック論田病院）のグループ法人で、医療法人が提供する地域包括ケア病棟やリハビリテーションなどとともに、地域の医療・福祉を担つてきた。

2012年には、徳島産の木材だけを使用した、全国でも珍しい木造2階建ての小規模多機能型住宅介護併設型高齢者向け優良賃貸住宅「シニア向け長屋住宅あさがお邸」を開設し、話題となつた。「つだまちキッチン」開設にあ

たり、保岡さんはまず、住民に聞き取り調査を行つた。

その結果、高齢者が日常生活に困つてること、若い母親が子育て支援サービスを求めていること、発達障害をもつ子どもたちの学童支援が求められていることなどたくさんの声が寄せられ、それに応えるかたちで、2015年5月、ユニバーサルカフェ「つだまちキッチン」を開設した。

建物は、ネイビーグリーンを基調にした三角屋根の平屋建てで、延べ床面積は500m²。「木造建

築でカジュアルな佇まいの、スターバックスコーヒーをイメージしました」（保岡さん）。事業費は土地・建物を含め1億3000万円で、初年度は3000万円超の赤字を計上したが、3年目を迎え、今年は事業としての目途が立つってきたという。職員は21人で、常勤者が6割を占める。事業別では、通所介護部門に9人、放課後等デイサービスに6人、ユニバーサルカフェに6人が勤務している。

事業は大きく2つのゾーンからなり、地域公益事業ゾーンと福祉ゾーンが稼動している。

**多世代がくつろぐ
カフェスペース**

地域公益ゾーンは、管理栄養士監修の、できたての惣菜や弁当、パン、菓子などを低廉な価格で販売する売店コーナーと厨房、食事ができるカフェスペースからなる。ちょうど訪れたのがお昼時で、売店コーナーもカフェもかなりの人で賑わっていたが、それでもこの日は少ないほうだという。

最近では、毎日60人程度が訪れるそうだ。健康ブームもあり、隣の男性サラリーマンの利用が増



多世代が食事やおしゃべりを楽しむカフェスペース



デイサービスでの調理



できあがったカレー鍋

キッチンが 人と人とのつなげ る

一方、福祉事業ゾーンは地域交流イベントスペースとデイサービス、オープンキッチンからなる。カフェスペースとは入り口ができる

えている。

カフェスペースは、約10坪に、窓際席、テーブル席、マットを敷いた子どもコーナーなどを配置している。

窓際席をほぼ毎日利用するという高齢の女性は、「買い物が遠くなつて大変だったけれど、ここがで大助かり。いつも夕飯用に惣菜も買って帰るの」と、子どもコーナーで遊ぶ児童たちに目を細めながら、定食を食べていた。テーブル席では、お茶とケーキを前に親子と思われる女性2人が談笑し、今日は休みだという若い父親と母親は、子どもを遊ばせない高齢の女性は、「買い物が遠くなつて大変だったけれど、ここがで大助かり。いつも夕飯用に惣菜も買って帰るの」と、子どもコーナーで遊ぶ児童たちに目を細めながら、定食を食べていた。テーブル席では、お茶とケーキを前に親子と思われる女性2人が談笑し、今日は休みだという若い父親と母親は、子どもを遊ばせない

がら食事をしている。

片隅に1人で座る若い女性は、職員によると「1人で来ても落ち着ける場所」といって利用している。

別で、地域交流スペースは15時を過ぎると、定員10人の発達障害児童の放課後等デイサービスにもなる。

福祉事業ゾーンは約30坪で、床暖房が入っている。徳島産の杉を使つた大きな梁と高い天井、徳島産の杉の使用に林业飛躍基金補助事業を実施しており、「つだまちキッチン」は3000万円の補助を受けている。

福祉事業ゾーンでも食を通して交流が運営の理念となつており、調理台を3カ所設置したオーブンキッチンが、さまざまな人をつなげる場となつている。年間行事として、味噌や、地域の高齢者世帯に向けた正月の「おせち」もここでつくる。今年の正月も、50食の「おせち」が即日完売した。

デイサービスは、調理をとおしてリハビリテーションを行う生活機能訓練特化型だ。管理栄養士が作成したメニューに従い、オープンキッチンでそれぞれが役割分担をして調理し、できあがった料理をみんなで食べる。



この日のメニューは、地場産の冬野菜に、さばの切り身が入つたカレー鍋だつた。特産のレンコン米も地元産だ。皆さん熱々の鍋をきれいに召し上がっていただけた。

デイサービスを利用していた男性の1人は、あさがお福祉会のケアハウスの住民だつた。週2日利用しているという。「これまで利用していたデイサービスとは、食事がまったく違います。ここでの定員は15人だったが、今年2月からは30人に増やしている。調理をとおしたりハビリは確

選ばれる事業者

社会福祉法人あさがお福祉会

ユニバーサルカフェ「Tsuda Machi Kitchen (つだまちキッチン)」

- 住所〒770-8003 徳島市津田本町2丁目3番地の57
- TEL 088-635-1295
- 定員 30人(デイサービス)



連携してエビデンスを蓄積している。脳梗塞の後遺症が残る元寿司職人の利用者は、麻痺がありながらも魚などを見事にさばく。職員が目を見張る場面も多く、本人に自信と笑顔が戻ってきたという。午後はリラックスタイムで、日によっては理学療法士、作業療法士、アロマエステなどの資格をもつグループ法人の専門職が訪れ、指導にあたる。現在、浴室を施工中で、近く入浴サービスも開始する予定だ。

開設から3年を経て、保岡さんは、「つだまちキッチン」で「化学反応」がおきていると話す。職員も異業種の人を多く採用し、それぞれがもつ人脈や、訪れる人たちの出会いが輪を広め、新しい福祉を育て始めている。

たとえば、カフェを利用している子育て中の母親から「私もここで働けないか」との相談があり、パートタイマーで雇用を始めたことで、これまで働きたくても働けなかつた主婦の就労支援につながった。一方で、母親が安心して働けるよう、子どもたちの預かり事業も始まった。親子がお互いの姿を確認しながら働いたり遊んだりできる。

月2回の子育て支援事業は、子育て支援ネットワーク徳島の協力を得て行っている。専門家による育児相談や食育セミナーなども実施しており、年々若い母親たちの参加が増えている。

2016年5月からは月1度、自宅で満足に食事がとれない子ども

活動がおこす 「化学反応」

もを対象に、夕食を無償で提供する「ゼロ円食堂」を始めた。補助事業ではないので、すべて持ち出しだが、実施日には毎回平均30人弱の子どもたちが訪れるそうだ。

また、交流スペースでは、結婚式なども行われている。点から線、線から面へ、人と人がつながり、活動が大きく広がりつつある。

食べることは年齢を問わず、共通のテーマである。ユニバーサルカフェ「つだまちキッチン」の真髓は、食を通してさまざまな人が「つながる」場所になつていることだ。

保岡さんは、これから地域おこしは、社会福祉法人が担うべきだと主張する。細やかに地域住民の声を聞きながら、求められている。「つだまちキッチン」はその実験の場でもある。

これまで社会福祉法人は、国が定める法の規制の下で事業を行つてきたが、もつと自由な発想が必要だ。そのためには自治体の補助



地域交流イベントスペースでの子育て支援事業

(池田敏史子)

「つだまちキッチン」で公的補助を受けているのは、デイサービス、発達障害者共同生活援助、放課後等デイサービス事業などで、他の事業は地域公益事業として行つている。サービスを提供する事業者側のエゴで進めるのではなく、「形にとらわれず、地域のみんなで知恵を出しながら、新しい福祉サービスにつなげていきた」と話してくれた。